
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第30号 2023年3月

〈居場所づくり〉のエスノグラフィー

— 若者支援NPO「ふらっとほーむ」(2003-2019)を事例に—

An Ethnography of “Place-making” Practice

— Case Study of Youth Support NPO “Plathome” (2003-2019) —

滝口 克典 | TAKIGUCHI Katsunori

〈居場所づくり〉のエスノグラフィー

— 若者支援NPO「ぷらっとほーむ」(2003-2019)を事例に —

An Ethnography of “Place-making” Practice

— Case Study of Youth Support NPO “Plathome” (2003-2019) —

滝口 克典 | TAKIGUCHI Katsunori

This study clarifies the contribution of “place-making” to contemporary social movements. Social movements in the era of individualization are required to respond simultaneously to different political theories (identity politics, meta-life politics, and citizenship politics). In this paper, through an ethnographic examination of the youth support practice of “Plathome” (Yamagata City, 2003-19), I have verified that “place-making” is a response to such requests. At “Plathome”, the following spatial practices were carried out: free space, which is located at the center of activities, is mainly for meta-life politics and citizenship politics, while the thematic communities around it are responsible for identity politics. In examining contemporary social movements, it is meaningful to pay attention to such spatiality.

Keywords:

居場所づくり 社会運動 社会モデル エスノグラフィー

Place making Social movement Social model Ethnography

〈居場所づくり〉のエスノグラフィー

:若者支援NPO「ぷらっとほーむ」(2003-2019)を事例に

1 問題の所在

現在、さまざまや領域に広がり多様性をもって展開している〈居場所づくり〉の諸実践(田原2017、共同通信社取材班2021)。もとは「不登校の子ども」の支援活動として1980年代に始まったそれは、〈居場所〉を喪失していたさまざまな隣接カテゴリーの人びとのあいだに拡散していき、現在の〈居場所〉の遍在とも呼ぶべき状況へと至っている(南出2015)。

1980年代というのは、日本においては、近代化のプロセスが一巡し、社会から「貧・病・争」が一掃されたポスト高度成長の時期である。「豊かになりたい」という人びとの共通の欲望が達成されたことで、これ以降、各自の求める価値が多様化・複雑化し、欲望が不透明化していく。供給サイドではなく、需要サイドが重要度を増す消費社会の始まりである。

であるなら、〈居場所づくり〉の実践の潮流というものを、1980年代以来の消費社会のありようとの関連のなかで理解する必要がある。柳下・高橋(2011)はこの観点から、「子ども・若者の居場所」を、同時代の先進諸国を席卷した環境運動や反核運動、フェミニズム等と並ぶうる、「消費点における市民的な運動」として評価する。本稿もこの観点を共有する。

では、〈居場所づくり〉がそうした消費社会における新しい社会運動に比肩しうるものだったとして、それが社会運

動史につけくわえた新しさとは何だったのだろうか。環境運動や反核運動、フェミニズム、障害者運動など、80年代における新しい社会運動の特徴は、「消費点」、すなわち需要サイドからの異議申立運動、当事者運動だった点にある。

要するにそれは、差別や排除の憂き目にあっている被害当事者が集い、「同じ痛み」を共有するコミュニティをつくって、社会や政府に加害をなくすよう訴えていくもので、アイデンティティ・ポリティクスと呼ばれるありようである。千葉・綿野(2020)はこれを「当事者がやられて・やりかえす」と簡潔にまとめる。

ところが、アイデンティティ・ポリティクスには、さまざまな課題も存在する。確かにそれは、運動に随伴して、孤立する当事者たちが安心・安全に出会い、コミュニケーション可能な時空間をつくりだしてきたという点で意義が大きく、現在なお必要とされ続けている方法なのだが、まさにそのことのゆえに抱えざるを得なくなっている困難も存在する。

例えばそこでは、社会運動を成功裏に進めるために集会的アイデンティティの構築が避けがたく求められるのだが、それは当事者のなかのマイノリティの抑圧や排除に容易につながりうる。運動内の——あるいは外の——マイナーな声を運動のマジョリティがどのように抑圧するかについては、貴戸理恵・東京シュレー論争(2005年)が具体例を提供した。

あるいは、当事者の細分化という問題もある。彼(女)らは「同じ痛み」を資源に運動コミュニティを形成するが、それはカテゴリーが異なる人びとと連帯するきっかけを奪うものにもなりうる。性的マイノリティといっても、ゲイとレズビアンでは利害が異なるし、彼(女)らセクシャル・マイノリティとジェンダー・マイノリティのそれも異なるように。

社会運動の試行錯誤は、こうしたアイデンティティ・ポリティクスの隘路をも見据え、その周辺に困難をのりこえるためのさまざまな方法論のレパートリーを編み出していくこととなる。やや前置きが長くなってしまったが、新しい社会運動において〈居場所づくり〉に固有の新しさがあるとすれば、それはこの局面に関わるものである。

この新しさを、荻野(2006)は「メタ・ライフ・ポリティクス」と定式化する。1980年代以来の消費社会と地続きである個人化の趨勢は、寄る辺を失くして自身の「痛み」を適切に分節できる準拠棒をもたず、存在論的不安のなかで生きづらさを抱える人びとを生みだしてきた。その典型例が、「不登

校・ひきこもり・ニート」といった問題群である¹。

アイデンティティ・ポリティクスは、「同じ痛み」を共有する人びとの運動コミュニティであるため、自らの「痛み」をカテゴリー化できていない者は参入不可能だ。彼(女)らのニーズに応えられる代替案——アイデンティティを経由せず、とりあえずそこに身をおき、存在論的安心を確保しながら創傷した自己を修復していけるような——が必要である。

この代替案が荻野のいう「メタ・ライフ・ポリティクス」であり、それは「不登校・ひきこもり・ニート」の子ども・若者たちを対象とする〈居場所づくり〉の活動のうちにはっきりと確認できるという。いわばそれは、アイデンティティ・ポリティクスの手前に支援空間の外縁を拡張していく「プレ・アイデンティティ・ポリティクス」である。

他方、〈居場所づくり〉の外縁拡張はまた別の領域にも及んでいる。それは、個人化の時代のアイデンティティ・ポリティクスがもたらしたカテゴリーの細分化と相互の分断とに関わる。カテゴリー化を受け入れ、それを手がかりに「同じ痛み」の当事者運動に参入できるのだとしても、「痛み」のありようはそもそも個々に応じて多様であったはずである。

アイデンティティ・ポリティクスは、そうした多様性を細切れのカテゴリーの鋳型に還元してしまう。それは、社会運動を減速させ、分断統治へと収斂させたい統治当局の思惑とも共振する。この隘路を回避するには、アイデンティティを経由しない、あるいは複数のアイデンティティにまたがるような、また別の連帯の形が求められる。

千葉・綿野(2020)のなかで、千葉雅也はこれを「シティズンシップ・ポリティクス」と呼ぶ。「どんなアイデンティティを持っている人でも、市民は一律に市民である。属性に関係なく市民は市民である以上、享受すべき基本的な権利が侵されているなら、市民なら誰でも訴え可能。…(略)…これがシティズンシップの政治」なのである。

このように、アイデンティティではなく、市民性を参加要件と考える運動論がシティズンシップ・ポリティクスである。〈居場所づくり〉においては、2000年代以降、さまざまな属性の人びとが身をおき、同じ時空間を享受する共生の実践が「まちの居場所」の名のもとにとりくまれていくが(日本建築学会2010、2019)、これがシティズンシップ・ポリティクスに該当する。

以上のように、アイデンティティ・ポリティクスの困難を補完するように、その周囲にプレ・アイデンティティ・ポリティクスやシティズンシップ・ポリティクスを創出していったことが、〈居場

所づくり)の新しさ、現代性であると考えられる。新しい社会運動の機能的な拡張とも言える。だがそれは、ある新しい困難を〈居場所づくり〉にもたらしこととなった。

そもそもが、上記の三つのポリティクスそれぞれが機能する領域は分離されていなければならない。それらは相互に対立したり矛盾したりする運動の方法論だからである。例えば、個々のアイデンティティを際立たせること(アイデンティティ・ポリティクス)は、それが未確立の者や異なる者との摩擦を生むだろう。同じ空間内でそれらは両立しえない。

とすると、相互に矛盾し対立する三つのポリティクスが要請されるようになった現在、新しい社会運動としての〈居場所づくり〉はどうやってそれらを共存させているのだろうか。本稿では、現在の社会運動がその先端で抱えることとなったこの新しい課題に、実際の〈居場所づくり〉がどう応えているのかを明らかにし、そのことの意味を考察する。

まずはこの問いに関係する〈居場所づくり〉の研究史を概観し、本稿の視点を定めたのち(第2節)、検討の対象となる事例とその分析方法を説明する(第3節)。そののち、具体的な〈居場所づくり〉実践の事例検討を行い(第4節)、そこで何が試みられ、達成されているかを明らかにしつつ(第5節)、それが社会運動史にとって有する意味を考察する(第6節)。

2 研究史

実際の〈居場所づくり〉実践が相反する三つの要請——アイデンティティ・ポリティクス、メタ・ライフ・ポリティクス、そしてシティズンシップ・ポリティクス——に同時に応えうるとすれば、それは実践主体がその支援空間をゆるやかに切り分け、役割や機能の棲み分けを行うことによってではないだろうか。本稿は、この仮説から出発していく。

こうした空間編成の実践という視点から〈居場所づくり〉の研究史を眺めてみた場合、欠かすことのできない二点の研究——荻野(2013)と川北(2014)——が存在する。まずはこの二点の成果をレビューすることで、空間実践としての〈居場所づくり〉を捉える研究の達成と課題とを明らかにしたうえで、本稿の論点を抽出したい。

まずは荻野(2013)だが、この研究は、ひきこもり支援を行うフリースペースへのフィールドワークに基づくエスノグラフィである。支援活動の中心に位置づいているのはフ

リースペース、すなわち〈居場所づくり〉の実践だが、フリースペースの周辺には荻野が「半外地」と呼ぶ、内と外の境界領域が開かれ、支援にとって重要な役割を果たしている。

配慮や支援が十全に行われ、しかもそれが期待されるフリースペースは、ともすれば他者性や偶発性に乏しい儀礼空間に陥ってしまいやすい(荻野2007)。利用者の若者たちにとって、そこでのチャレンジはお膳立てされた予定調和の域を出ないものになってしまう。これでは、試行錯誤に裏打ちされた自信や自尊感情につながっていかない。

一方で、配慮や支援に乏しい外部の世界は、彼(女)らにとって、いきなり足を踏み入れるにはハードルの高すぎる場所である。必要なのは、制御された偶発性・他者性と、安全・安心とがほどよくミックスされた中間領域であり、この要請に応えてつくりだされていたのが諸種の「半外地」——例えば、スタッフといっしょの職業体験など——なのであった。

この研究が明らかにしたのは、〈居場所づくり〉が創出する時空間というのはのっぺりと均質なものではなく、参加しやすさや関わりのあるかたに濃淡や凸凹を抱えたものだということである。この濃淡や凸凹のゆえにこそ、支援空間内の生活やコミュニケーションにメリハリが生まれ、さまざまな経験が促進されていく。川北(2014)はこのメリハリの意味を問うていく。

川北(2014)もまた、ひきこもり支援を目的とする活動団体へのフィールドワークを基にした調査研究である。同団体は、複数の地域にまたがって、いくつかの活動拠点をかまえ、そのそれぞれで「居場所」の提供や「就労支援」などを行っていた。つまり、地域社会のなかに複数の差異を伴った支援空間をつくりだし、供給していたわけである。

ユニークなのは、そうした複数の空間が存在していることで、利用者の若者たちがそれらを対比しつつ自由に取捨選択したり、それらのあいだを回遊したりすることが可能となっている点である。この自由度が間接性を生み出し、若者たちはゆるやかな刺激のなかで試行錯誤を繰り返し、経験と自信とをスモールステップで蓄積していたのだった。

このように、これまでの研究では、〈居場所づくり〉というのが不均質な空間を創り出す実践であること、そしてその不均質さや複数性こそが〈居場所〉の効用を発生させていたことなどが明らかにされてきた。しかしそこでは、空間内の差異がどのように配置され、それぞれがどのような機能を

果たしているかについてまで明らかになっているわけではない。

先に確認した、社会運動としての〈居場所づくり〉実践が現在おかれている状況、さまざまな運動論の要請にそれがどう応えているのかを理解するには、〈居場所づくり〉のこの空間実践の具体相を明らかにする必要がある。それは、従来の社会運動にはない〈居場所づくり〉の強みや新しさを解明するのに不可欠の問いとなるだろう。

〈居場所づくり〉は、役割や機能の異なる空間の複数性を創り出し、そのそれぞれに異なる運動論を担わせることによって上記の相矛盾する諸要請に込めているのではない。以下では、本節冒頭で述べたこの仮説を、〈居場所づくり〉実践の具体的事例の検討をもとに、そこで行われている空間実践のありようを明らかにしつつ検証していきたい。

3 方法と対象

以下では、〈居場所づくり〉の実践がその運動の内部でどのような空間の編成を行い、配置したそのそれぞれの空間にどのような機能や役割を割り当てていたのか——以下ではこれらを「空間実践」と呼ぶ——、そしてその役割や機能は実際にそこに身をおいていた人びとによってどのような場所として生きられていたのかを、実際の実践事例をもとに明らかにしていく。

上記の目的にとっては、質的データでその場所の経験のありようを「厚く記述」(ギアーツ1973=1987)していくエスノグラフィーの方法を採用するのが適切であろう²。よって本稿の事例検討では、〈居場所づくり〉の空間実践のエスノグラフィーを試みる。事例としては、若者支援NPO「ぶらっとほーむ」(2003～19年、山形市)を検討の対象に据える。

「ぶらっとほーむ」(以下「ぶらほ」と略記)は筆者がかつて同団体の共同代表としてその運営や活動に深く関与していた〈居場所づくり〉の実践である。これまで明らかにされてきたように(滝口2016)、その実践は「言語化」を重視して行われていたもので、活動団体が解散したいまも、活動についての当時の記録や史料が豊富に残されている。

後述するように、「ぶらほ」ではその場に参加する人びとによるさまざまな語りやことばが紡がれ、それらが編み込まれたさまざまな種類のテキストが産出されてきた。それらに刻まれた人びとのことばは、〈居場所づくり〉の空間実践を

明らかにしていくための手がかりとして貴重である。このデータの得やすさこそが「ぶらほ」を対象とする理由である。

産出されてきたテキストとは、具体的には、同団体が活動の一環として発行してきたさまざまな冊子をさす。それらは、〈居場所づくり〉実践の内情や価値を外部の人びとに伝えるために発行されていたもので、その際、利用する若者たちの語りや素材として用いられていた。実践に伴って生まれたリアルタイムの声が凍結保存されているようなものである。

ところで、「ぶらほ」は16年間に及ぶ実践の連なりであり、時期により活動の内容や規模に変化がある。よってどの時期のテキストを用いるかで見えるものが変わってしまう。本稿では〈居場所づくり〉の空間実践のありようの全体像を、その一事例を通じて概観していくことが目的であるため、実践が安定的かつ定常的に行われていた時期に照準する。

「ぶらほ」という〈居場所づくり〉実践の場合、人びとの間で「ぶらほらしさ」が確立されたとの認識が生じ、そうした運動アイデンティティが安定し始めたのは2006～08年頃で、その後2012年頃までそれが継続していた³。よって本稿はこの時期のテキストを主な対象としつつ、必要に応じそれ以外の時期の記述もとりいれながら、検討を行っていく。

この2006～08年頃の代表的なテキストが、外部向けの〈居場所〉案内冊子『居場所がほしいあなたのためのぶらっとほーむ入門』(B5判、約50頁、2006～08年に毎年刊行、以下『入門200X』と略記)という冊子群である。これ自体が、2003年開始の運動が自らのアイデンティティを確立し、それを外部に表出し始めていったことの現われである。

これらは、「居場所の日常風景や利用者の声など、外部からはわかりにくい「ぶらほ」の活動実態を、漫画や文章でわかりやすく紹介し、「ぶらほ」についての理解を深めてもらおう」との意図で、2006年からの三年間、「ぶらほ」の人びと——当初はスタッフ、のちに利用者の若者たちがそこに合流する——によって制作・発行されてきた手づくりの冊子群である。

ここでは、同団体の活動、とりわけ〈居場所〉での日常風景をマンガで紹介した記事や〈居場所〉での体験をめぐる利用者／スタッフの語り、スタッフどうし、利用者どうしの対談などが収められている。それらは主に、当時スタッフであった筆者が、他スタッフや利用者へのインタビューを通じて収集し、編集を施したものである⁴。

さらに、「ぶらほ」は会員向けに活動報告を行う媒体として『ぶらほ通信』（創刊号～終刊193号、12号までB5判、それ以後A5判、各8または12頁、以下『通信』と略記）を毎月発行していた。こちらにも、「ぶらほ」界隈の人びと——スタッフならびに利用者、協力者、支援者、関係者など——のさまざまな声や活動の痕跡が記録されている。

また、筆者は同団体の運営及び活動のスタッフとして実践現場にも関与してきた。そうした参与観察のデータも、〈居場所づくり〉の空間実践の機序を質的に明らかにしていくのに役立つものである。それらの痕跡もまた「ぶらほ」が残した上記以外のさまざまなテキストのなかに断片的に散在している。本稿では、随時それらをも参照しつつ論を進めていく⁵。

これらのテキストは〈居場所づくり〉実践の過程で実際に行為遂行的に用いられ、公開もされたものである⁶。よって、本稿で解釈に用いたデータについては基本的に誰であっても追跡が可能であり、他者の検証にも開かれている。そうした公開性や検証可能性をもって、本稿では、研究倫理上必要な最低限の条件をクリアしているものと考ええる。

4 事例検討

「ぶらほ」とは、2003年4月から2019年3月まで、山形市内で「孤立しがちな若い世代の居場所／学びの場づくり」をミッションに20～40代の会員たちによって運営されてきた〈居場所づくり〉の市民活動実践である⁷。その共同代表を、活動の始まりから終わりまで、筆者（1973年生まれ、男性）と松井愛（1976年生まれ、女性）がとめてきた。

後述するように、年を経るごとにその活動は多岐にわたっていくようになり、それが最も活発であった時期には、実人数で年間300人以上もの人びとが参加するようなコミュニティとなっていた。なお、母体となったNPOは2019年8月末に解散し、2022年現在、その〈居場所づくり〉の活動が後継の三団体に引き継がれ、同市内の各所で続けられている⁸。

専従のスタッフは上述の松井を含む1～2人でいどで、他は、別の足場や仕事もちつつ、自身にとってのサードプレイス（オルデンバーグ1989=2013）として活動に関与していた。こうした活動スタイルは、「タコ足モデル」と呼ばれ、推奨されていた（筆者もそうした兼業スタッフの一人であっ

た）。ボランティア・ベースで運営され、予算規模が年間1000万円未満の小さな「草の根NPO」（澤村2006）である。

「ぶらほ」はその活動が安定期を迎えつつあった2007年頃——それは「ぶらほ」が活動を開始して5年目にあたる時期である——、孤立する若者たちに、彼（女）らが安心して帰属でき、そこから多様な社会参加に向けてチャレンジできるような〈居場所〉を、「居場所づくり」と「学びの場づくり」という二つの柱で供給する事業を行っていた。

前者には松井（当時30代）、後者には筆者（当時30代）が責任者として関与し、「フリースペース」と「テーマ・コミュニティ」をそれぞれ運営していた。この二つの「場づくり」は、ゆるやかに重なりあいつつも、異なる論理で運営・実践されていた。以下では、それぞれの「場づくり」のありようを、そこにいた人びとの声などから再現し記述していく。

1) 「居場所づくり」の諸実践——フリースペースでは何が行われていたか

「ぶらほ」は、活動の始まりから終わりまで途切れなく、「誰でも参加OK」のフリースペースを開設していて、この活動があらゆるとりくみの中心に位置づけられていた。最初の10年間は山形市郊外の住宅地にある一軒家、その後は中心市街地の文教地区にある空き店舗を活動の拠点とし、そこをフリースペースとして開放してきた。

本稿が主な対象とする時期は2006～12年頃であるため、その当時のフリースペースは前者にあたる。山形市西部の閑静な住宅街にその木造平屋の一軒家は位置していて、入居の数年前までは共同代表である松井の祖父母が暮らしていた。彼（女）らが亡くなり、空き家となっていたところを、物件の管理を条件に松井の兄より安価で借り受けることになったのである。

よって、2003年春の入居当初は6～8畳の四間から成っていた一軒家のすべての部屋に以前の住人の生活用具や介護用品等が残されていた。このため、まずは、玄関に入ってすぐの茶の間と仏間の仕切りを外してひと連りの空間とし、片づけをしてフリースペースを設置、あとは随時必要に応じて荷物を片づけながら活動スペースを広げていった。

本稿の対象となる2006～08年頃には、12畳+縁側のスペース（もとは茶の間と仏間、畳敷きで座卓やコタツがあり、

その周りに座布団がおかれている)、廊下をはさんで6畳の事務室(インターネット接続のパソコン、事務机と椅子、電話がある)、そして廊下の先にある8畳の奥の間(物置部屋で、座卓と座布団、座椅子などがある)が活用されていた⁹。

フリースペースと言った場合、事業や実践の名称としてはこの一軒家における——さらにはそこを起点とする——すべてのとりくみがそれに包含されていたが、その核となるイメージは、上記の12畳のスペースで繰り広げられるコミュニケーションにあった。よってフリースペースの実践のベースは、この部屋でのコミュニケーションにある。

そうしたコミュニケーションの中心に位置し、震源を成していたのが、共同代表の松井である。活動当初から2012年まで、松井はフリースペース、とりわけこのメインルームに専従スタッフとして常駐し、訪れる子ども・若者たちを迎え入れてきた。「ぶらほ」の「居場所づくり」とは、第一に、松井の居るこのフリースペースにおける諸実践を意味した。

まずは、『入門』をもとに、こうした空間におけるコミュニケーションの平均的なイメージを共有しよう。入ってすぐの12畳のスペースでは、スタッフの松井を起点としたおしゃべりに興じていることが多い。その輪とは別に、利用者どうしで話している人たちもいれば、部屋の片隅でノートに何か描いている人、持参した携帯機器でゲームに没頭している人などがある。

他方、廊下を挟んだ向かいの部屋——インターネット接続のあるパソコン、事務机と椅子が設置されている——は、当初は「スタッフ・ルーム」(スタッフの事務作業用の部屋)と位置づけられていたが、趣味のサイトを閲覧している人がいたり、集まって話している人がいたり、スタッフの位置づけとは無関係に利用されることも多かったようである。

そして、玄関からまっすぐ奥に伸びる廊下の先の奥の間。通常は物置や荷物置き場となっていたその部屋は、あらたまって何かを行うような場面で使われているようである。例えば、有志で行う企画のミーティング——『入門2008メンバー篇』の編集会議はその代表例——や個別相談、学習支援などがこの部屋で行われていた。

2006～12年頃、以上のようなフリースペースが開かれていたのは、毎週水曜から金曜、13時から17時までのあいだであった。「いつ来ても、いつ帰ってもOK」とされるその場所に、この当時は、平均して一日に5～6名ほどの子ども・若者たちが訪れていた。その属性や立場、年代、境遇はさまざまであった。

スタッフが、利用者の人たちのおかれた状況に関する情報——とりわけ彼(女)らの「生きづらさ」に関わるそれ——を積極的に集めることはなく、どんなカテゴリーの人びとがそこを訪れていたのかについての確定的な記述は不可能である。だが、フリースペースでの会話や本人による語りなどでそれが自然と明らかとなっていくことも多かった。

そうして蓄積されていった情報によるなら、フリースペースには以下のようなカテゴリーの人びとが通ってきていた。すなわち、「不登校(中学・高校)」「通信制高校生」「大学生」「ひきこもり」「ニート(若年無業)」「フリーター(非正規雇用)」「会社員」「自営業」「主婦」「ろう者(視覚障がい)」「発達障がい」「精神障がい」「UJIターン」「性的マイノリティ」などである。

2006～08年当時、出入りしていた人びとはすべてあわせて40名ほどであった。フリースペースを利用するには、利用料として一回1000円の負担が必要で、彼(女)らはそれを支払ったうえでそこを利用していた。とはいえ、それは何らかの支援サービスに対する対価としてではなく、その場所を維持するための会費として集められていたものだった。

これは、通ってくる人びとの目的や意図が雑多であることも通じている。例えばある者は「外に出て人とコミュニケーションするときの予行演習」(『入門2006』33頁)、別の者は「癒しとか安らぎの場所」(同32頁)、また別の者は「勉強の場。世間のこととか、人が使う言葉…(略)…そういうわからない言葉なんかを教えてくれる」(同29頁)と語る。

こうした雑多さは、フリースペースの目的性の弱さ、弱目的性(藤原2020)により、参加する人びとのさまざまな目的論がその空間にもちこまれるがゆえに生じているものと考えられる。「ぶらほ」はそうしたさまざまな目的論の混在を、何らかの共通目的へと整理したり統一したりすることなく、それらをゆるやかに許容している。雑多さとは、その結果であった。

かくしてフリースペースとは、そうした雑多な人びと——日によって誰が居るかはわからない——による対話や交流が日常的に行われている時空間である。彼(女)らは、「仏壇とかのある普通の家」(『入門2006』35頁)のそれぞれの場所で思い思いに時間を過ごす。そこでは、そうした自由なやりとりから「面白い」ことがランダムに自生していく。

そうした自由さは、参加する若者Aさん(30代・男性)によって次のように表現されている。

「「ぶらほ」は、ほんとにいろんな人が来るのでいい場所だと思って思う。別の支援団体のほうでA会っていうグループを運営していたんですけど、そのときに、最初に参加者の年齢制限をどうするって話が出たんですよ。中学生はダメみたいな話になって、俺は「別に誰でもいいのにな」って思ったんですけど、結局は高校生から30代までということで始まったんです。それで「ぶらほ」に来たら女子中学生の人とかがいる。自分はけっこうおっさんなので、「話が合うのかな」とか「話についていけないのかな」って不安感があったんですけど、そんなことは全然なかったですね。普通に話せるし、普通に聞ける。それが、意外と自分のなかでは面白かったんですよ。」（『入門2007』43頁）

専門性を売りにする支援団体の場合、対象者のカテゴリーの厳密な管理・統制が行われるのが常である。そこでは、利用者の側にコミュニケーションの選択の余地や自由が発生しづらい。「ぶらほ」にはそれがあり、ゆえにさまざまな出会いが生じうる。

それとも関連して、人びとが自身にまつわるカテゴリー等の自己情報をどこまで開示し、その空間に何者として姿を現わすかもまた、利用者の人びとそれぞれに任されている。たとえスタッフであっても、各自がどのような動機で参加しているかを事前に把握したり管理したりすることはない¹⁰。そのこともあってより自由度が高くなっているわけである。

そうした点——雑多さや即興性——で「ぶらほ」のフリースペースは、困難を抱えた社会的弱者のための支援施設というよりは、常連客の集う「喫茶店」のような趣の場である。「喫茶店」にはカルテも自己情報開示もない。話すかどうか、誰と話すかもその人の自由である。これについては、ある若者Bさん（10代・女性）の次のような語りがある。

「ぶらほ」の存在する意味は、ここに来ればいつでもあるっていう安心感みたいなものと、ここにいつ来てもよっていう気軽さですかね。…（略）…深刻に相談しに来る相談室という感じではなくて、顔を出せる居場所というか、自分が常連の喫茶店というか、そんな感じですね。あそこに行けば、知り合いがいて、ときどき気軽に顔を出して、そこでゆったり話ができる。（『入門2007』42頁）

上記を踏まえ、「ぶらほ」では、その人が（会費・通所等の

コストを負担してまで）フリースペースに通ってきている、という端的な事実をもって、彼（女）がそこを自分の〈居場所〉と位置づけていることのあらわれ、すなわち〈居場所〉の達成と捉えている。そうした時空間をつくりだし、広く提供していくことが〈居場所づくり〉になるわけである。

とはいえ、ただそうしたスペースを開き、人びとを迎え入れただけで、スタッフが何もせずともその人びとが勝手に動き、にぎやかな交流や対話が達成されていくわけではないだろう。だとすれば、そのフリースペースではいったいどのような実践がスタッフによって——さらには利用する人びとによって——行われているのであろうか。

フリースペースでは、常勤スタッフの松井が、訪れた人びとを迎え入れ、お茶を飲みながら談笑したり、話題を提供して場を盛りあげたり、人びとの輪から離れている若者に話を振っておしゃべりの輪につないだり、個別に相談に乗ったりしていた。いわば、参加者どうしのコミュニケーションを促進するファシリテーターの役割を担っているわけである。

そうしたやりとりを通じて、人びとのあいだから「〇〇に興味がある」「△△をやってみよう」等、それぞれの嗜好や欲望をめぐるさまざまなことばや語りが頻出する。その際に松井は、「やってみたらいいんじゃない？ 手伝うよ」と、それらの実現に向けて動き出すよう人びとを鼓舞したり、具体的に手助けしたり、といった関わりを随時行っていく。

では、〈居場所〉での支援のゴールはどこに設定されているのだろうか。「ぶらほ」のフリースペースでは、他の支援団体などで普通に行われているような、「学校に復帰する」「正社員になる」などの社会標準に準拠したゴールを想定し、そこに向けて彼（女）らを水路づけしていくような関わりは行われていない。むしろそれは、意識的に避けられている。

ここでは、ゴールは、上記のような外部からの持ち込みではなく、内部でのコミュニケーションを通じて生成する。このため、スタッフの役割は〈居場所〉でのコミュニケーションの活性化におかれており¹¹、やりとりを通じて浮上してきた誰かの「やりたいこと」を、自らも関わりながら、実現に向け支援していくことにあるとされているのである。

例えばそのようすは、ある若者Cさん（10代・女性）によって、次のように語られている。

スタッフ、メンバーともに、行動力がすごい。…（略）
…「ぶらほ」の人たちは、何か思いついたらすぐに行動を

起こす。その行動力の速さに、ついこちらにも触発されてしまう。「口では言っていたけどやらない」ということがない。メンバーの「何かやりたい」という声に対してスタッフがフォローを入れたり、スタッフの「何かやらないか」という声にメンバーが協力したり、お互いが補完しあう形で物事が進んでいく。（『入門2008スタッフ篇』34頁）

以上にあるように、唆したり背中を押したりというファシリテーターの役割は、スタッフによってのみならず、メンバーどうしによっても相互に果たされている。こうしたコミュニケーション環境のなかで、各自のゴールが自己組織化されてくるのである。

このように、フリースペースでのコミュニケーションを通じてさまざまな活動が生成していくわけだが、そこには、若者たちが気を許していることもあってか、彼（女）らのより深層にある本音や弱音が混じることも多い。そうやって口にされたことばのうちに、何らかのニーズらしきものを看取すると、スタッフはそれへの対処に動きだすこととなる。

その際、手もちの資源でその困難に対応できる場合にはもちろんそうするわけだが、困りごとの種類によっては、スタッフやその場にいる人びとだけでは対処が不可能なものもある。というか、フリースペースに集う人びとの雑多さの度合いが高じていくにつれて、当然ながらそういうケースも多く生まれていくようになる。

資源を内部で調達できなければ、外部から調達してくるよりほかはない。そこでスタッフは、その問題に対処できそうな資源を地域内から探し出し、その担い手の人びととつながり、彼（女）らと協働で当該の困りごとの解決にとりくんでいくこととなる。こうしたケースが、2006～08年頃から次第に増えていくことになった。

具体的には、「ぶらほ」と地域資源の両者が協力してその困りごとにとりくんでいくための小規模な集まりをフリースペースの周辺に新たに開き、そこを基盤にいっしょに学んだり考えたりしていく諸実践を行うというものである。この小規模な集まりは、のちに滝口によって「テーマ・コミュニティ」と名づけられ、その呼称が定着していくことになる。

そうやって開かれていく場には、「不登校・ひきこもり」「非正規労働」「NPO・市民活動」など、社会問題に関連するものもあれば、「花笠踊り」「コスプレ」「読書会」「映画」など、遊びや文化に連なるものもある。これらのテーマ型コミュニティが、「困りごと」を抱えた若者たちの自由に使える資

源や足場となっていくのである。

そうした活動の代表例としては、山形市の中心商店街で毎年行われる夏祭りイベント「花笠まつり」への参加（2007～18年）、各自が衣装を自作してキャラクターに扮しそれを披露しあう「コスプレパーティ」（2010～18年）などがある。これらは利用者どうしの日常のやりとりから自生的に生まれ、やがて定例化していった活動群である。

より短期的なものとしては、地域のさまざまな活動に参加し体験学習を行うスタディーツアー（不定期、2003～18年）、自分たちの日常や活動の風景をマンガで紹介する冊子『入門2008メンバー篇』の自主制作（2008年）、イラストやマンガなど若者たちの特技を生かした仕事おこし「キャラ化ビジネス・プロジェクト」（2010～13年）などがある。

どの活動にも参加する若者たちが協働でとりくむべき特定のテーマや課題、目標などが備わっているため、集まりが回を重ねていく毎に、次第に参加者どうしの間でつながりや仲間意識のようなものが生まれてくる。例えば、上述の冊子『入門2008メンバー篇』の企画を終えた後、ある若者Dさん（20代・男性）は次のような言葉を残している。

今回の『ぶらほ入門 [メンバー篇]』企画のように、有志を集めてまた何かをやれたらと思う。自分たちで心構えをもったり、手間暇かけて準備したり、一緒に作品を観て何かを持ち帰ったり、そういうことがもっとしたい。…（略）…こういうのは学校の日常にはない。学園祭の出店みたいなイメージ。（『入門2008スタッフ篇』39頁）

ここには、ささやかながら同じテーマのもとに集い、一緒にそれにとりくむ仲間集団という意識の芽生えがある。「テーマ・コミュニティ」と呼ばれるゆえんである。こうしたテーマ型コミュニティの自生は、スタッフらによって観察・分析され、この時期以降、そのしくみが〈居場所づくり〉のなかに意識的かつ再帰的に埋め込まれていくようになる。

その一連の実践には「学びの場づくり」という看板が掲げられ、やがて滝口がそれらを主宰していくようになる。滝口がそうした実践に踏み出したきっかけもまた、先に指摘したスタッフ、利用者の欲望の相互参照のなかで背中を押された側面がある（『入門2008スタッフ』16-17頁）。次項では、そうした「学びの場づくり」について見ていこう。

2)「学びの場づくり」の諸実践——テーマ・コミュニティでは何が行われていたか

「ぶらほ」では、上記のフリースペースを起点とする「居場所づくり」の諸活動と同時に、2007年頃より、特定のテーマを扱う学びの企画やプログラム——これらもまた「テーマ・コミュニティ」と呼ばれていく——が複数、並行して提供されるようになっていく。これらが「学びの場づくり」の諸活動である。

「学びの場づくり」の文脈におけるテーマ・コミュニティとはどのようなものだろうか。「居場所づくり」のそれと同様、それらはどれも参加者10人程度の集まりであることが多い。小規模であるがゆえの親密な雰囲気や運営されており、そのテーマについて遠慮なく語るということがやりやすい形になっているし、またそれが目指されてもいた。

プログラムの構想・準備はスタッフの滝口が主に担当し、彼による個別の声がけという形で、フリースペースの人びとに選択的に誘いがかけられる。もちろん、いきなりスタッフから自分と無関連の文脈が降ってくるわけではなく、フリースペースでの人びとの言動や傾向が観察された上で、それに合致あるいは近接するテーマがおそろおそろ投下されているのである。

そうした「学びの場」での活動に参加するかどうか、参加するとして、それらのどのコミュニティに参加するかは、個々の人びとに任されている。また、この参加への誘いは必ずしもフリースペースに集まる人びとだけに対してなされるわけではない。プログラムは、それが扱うテーマに関心がある外部の人びとに対しても開かれた形で実施されている。

プログラムの多くは、何らかの形で外部の世界に触れ、他者や社会を知るというものである。例えば、さまざまな職種の人びとを招いてのゲストトークによる仕事体験講座(2007～09年)¹²、映画作品を観て語る「シネマカルチャーサロン」(2010～15年)、社会学の観点から各自の関心事を研究していく「社会学ゼミ」(2008年、2010年)などである。

文献を活用した学びもさかんで、個別のテーマに関連する基礎文献を読んで若い世代向けブックガイドとしてまとめる一連のゼミ活動——「戦争ゼミ」(2008～09年)¹³、「NPOゼミ」(2009～10年)¹⁴、「ヤマガタ文学ゼミ」(2009～13年)¹⁵、「若者論ゼミ」(2010～11年)¹⁶、「よのなかゼミ」

(2011～13年)¹⁷——も活発に行われていた。

プログラムをきっかけに、参加者たちの間で自足的・自律的なコミュニティが発足していくこともあった。例えば、地域の中で孤立しがちなUJ1ターンの若者たちの意見交換や発信の場としてのミニコミ誌『ひまひま 山形よみかき小冊子』(A5判、各40頁、00～23号)の制作・発行(2011～19年)¹⁸はそうしたものの代表例である。

これと似た成り立ちのコミュニティ実践に、不安定労働の若者たちが相互につながり労働法などを学べる場づくり「ぶれカフェ」とそのメンバーによる参加型ミニコミ誌『ハタラクワタシ いまを生き抜くための若者しごと冊子(以下、『ハタワタ』と略記)』(A5判、各40頁、01～08号)の発行(2011～13年)¹⁹があるが、これについては後に詳述する。

これらのプログラムは、大体が月1回ペースの連続企画で、いくつかのものが並行して実施されていた。どれもワークショップ(参加型の場づくり)形式であったり、プログラムの最後に達成されるべき共通ミッションが定められていたりするため、回が重なっていくにつれ、次第に参加者どうしの間でつながりや仲間意識のようなものが生成してくる。

例えば、先にあげた若者の不安定労働をテーマにした学びの場づくりの企画「ぶれカフェ」に参加しているある若者Eさん(30代・女性)——彼女はもとはフリースペースの利用者ではなく、上記の「若者論ゼミ」をきっかけに「ぶらほ」と出会い、さまざまなゼミ活動に関わるようになっていた——は、その冊子『ハタワタ』に次のような言葉を寄せている。

具体的には解決しない問題も多いけれど、同じような立場の仲間と楽しく話ができる瞬間であったり、お互いに頼り頼られることがあったり、そういう小さなことの積み重ねで、人はなんとなく生きていけるものだと思うのです。／親友じゃなくていいし、家族でなくてもいい。何か(悪いことでも良いことでも)あったときに、「ちょっと聞いてよー」と言い合える仲間、そのちょうどいい距離感が私には心地いい。…(略)…／かつての、孤独で辛くて生きづらかった自分に、今の自分がしてあげたいこと。それがこの「ぶれカフェ」なのです。(『ハタワタ』07号、31頁)

これらは、先に見たフリースペースの日常から生成する特定テーマにまつわる活動の集まりと同様の結合と「ぶらほ」では捉えられていた。そこで本稿でも、「学びの場づく

り」というスタッフが意図的・自覚的にしかけたプログラムによって生成していった、これらのゆるやかなつながりについても「テーマ・コミュニティ」として捉えることとしたい。

さて、そうしたテーマ・コミュニティの多くは、それが「居場所づくり」由来のものであれ「学びの場づくり」由来のものであれ、「ぶらほ」が拠点をおいて活動する地域社会を舞台に、そこに存在するさまざまな社会文化やその担い手の人たちとの協働によって実施されているものである。その意味で、そこには他者性が埋め込まれている。

例えば、ドキュメンタリー映画『ひめゆり』（2008年公開）の自主上映会（2008、2009、2015年）や上映作品に関連した交流企画「コスプレパーティ」、映画を観て語る会「シネマカルチャーサロン」などは、山形市内の映画館「フォーラム山形」²⁰やその周辺で活動していたさまざまな自主上映サークル、映画関連NPOなどとの協働企画である。

これらの企画は、「ぶらほ」と上記各団体とがそれぞれの資源を持ち寄り、両者の中間にコモンズ（共有財）をつくりだすかたちで実施されている。例えば、上述の「シネマカルチャーサロン」は「フォーラム山形」との協働企画で、映画館併設のカフェを会場に、上映中の映画作品をとりあげ、集まった人びとがそれぞれについて感想や思いを語り合う場である。

会場や作品を映画館が提供し、サロンのファシリテーターを「ぶらほ」が提供する、つまり必要な諸資源を両者が持ち寄る形で成立している。そこでは、毎回約10人程度の参加者があったが、そのうち半分が「ぶらほ」の若者たち、残り半分を外部の人びとが占める状態が「いちばんバランスがよい」と考えられ、実際にそうした形が目指されていた。

ここからは、テーマ・コミュニティというものが「ぶらほ」という支援空間の内部にあるのではなく、はたまた完全なる外部にあるのでもなく、両者がゆるく重なり合う「半分、外部」の空間——荻野（2013）のいう「半外地」——に位置づけられていることがわかる。後述するように、これらは〈居場所〉の内／外をゆるやかに架橋する交通空間となっている。

これらは、だいたいどのテーマ・コミュニティにも共通して見うけられるものである。「半外地」を介して、フリースペースには外部につながるたくさんの孔（あな）が開いており、そこを通過してさまざまな異文化が常に流入して続けている。こうしたありようを、スマホを通じ外部と常時接続する若者たちを概念化した鈴木（2013）に倣い、多孔性と呼ぼう。

このように、「ぶらほ」の〈居場所づくり〉実践は、テーマ・コミュニティに代表されるさまざまな活動を通じて支援空間の内／外を隔てる境界線の引き直しを随時行い、〈居場所〉の外延を日々拡張している。つまり、〈居場所〉は生きており、日夜成長している。そうした〈居場所〉の育ちかたを、いくつかのエピソード記述でもって具体的に確認しておこう。

以下、〈居場所づくり〉の外縁拡張の具体例を、三つのテーマ・コミュニティ——①非正規労働、②子どもの貧困、③性的マイノリティ——のエピソード記述で示す。上記カテゴリーに当事者性を有する人びとが思いをつぶやき、それをスタッフが拾い上げ、やがてテーマ・コミュニティという〈居場所〉へと生育していったその諸過程を描写する。

なお、三事例はテーマ・コミュニティの発達過程をわかりやすく示すために選択したもののため、必ずしも本稿の対象時期に限られない実践である。①非正規労働のコミュニティは2007～13年、②子どもの貧困をめぐるそれは2016～19年、③性的マイノリティについてのそれは2018～19年にそれぞれアクティブであったテーマ・コミュニティである²¹。

①非正規労働をめぐるテーマ・コミュニティ

以下は、フリースペースの日常における何気ないやりとりから始まっていったものである。2007年のある日、利用者のFさん（20代・女性）やGさん（20代・女性）がふと口にしたことばから、彼女らがアルバイトをしている職場でその上司より各種のハラスメントを受けているらしいことが発覚するまできごとがあった。

その後、いくつかのやりとりを経て、彼女たちが自身のおかれた状況を「自分は仕事ができないのだからそういう仕打ちを受けるのはしかたない」と解釈し、「できない自分が悪い」ということばで自身を納得させ、その状況を甘受しているということもわかってきた。Fさんはそのことが理由で職場を辞め、アルバイト先を変えてもいたようだった。

ここには、他者からの被害をなかったことにし、自己責任に回収してしまう認知の歪みが存在する。スタッフはこの状況をそう理解し、彼女の規範を解除し、「労働者の権利」の観点から資源を供給していくよう介入していくことにした。そして、この状況に対処可能な資源として、当該地域で活動していた地域ユニオン「山形県労連」事務局とつながる。

しばしの交流を経て、彼（女）らと協働で、参加型の講座「労働相談を体験してみよう」を開催することになった。講

座は2008年2月に開催され、10人ほどが集まった。先のFさんも参加し、地域ユニオンという資源とつながり、彼(女)らから学びつつ、自らの困りごとについて解釈したり語ったりするためのことばを獲得していった。

こうした講座では、参加者がそれぞれの体験を自らの実感の伴うことばを用いて語りあうという形式をとっていることもあり、他の参加者の似た悩みが明らかとなることも多い。その場合、継続的にその問題について語ったり学んだりできる場を定期的に開くことにもなり、そのテーマ・コミュニティが次第に常設化されていくことになる。

非正規雇用の若者たちがおかれた劣悪な労働環境という問題については、その後も何度か、フリースペースの日常のなかで単発的に上記のようなやりとりが生まれ、対処されていったが、2011年に、非正規雇用の問題をめぐっての懸案事項を抱えている同職種の若者たち5人ほどが一堂に会し、「山形県労連」スタッフも交えて話し合いをすることになった。

そこでのやりとりで「定期的に集まれる居場所がほしい」ということになり、2011年秋から2013年春まで、毎月、「ぶれカフェ」というテーマ・コミュニティが定期開催されることになった。なお、そうして生成してきた労働問題のテーマ・コミュニティ、そしてその達成と課題については、滝口(2019)が詳細な検討を行っているので参照されたい。

②子どもの貧困をめぐるテーマ・コミュニティ

2016年は、子どもの貧困に対する民間の共助のとりくみとして、子ども食堂の実践が脚光をあびた一年であった。新聞やテレビで目にすることも多くなってきた同年の春先、フリースペースでの何気ないやりとりのなかで、そのことが話題にのぼった。やりとりしていたのは、子育て中の二人の女性、Hさん(40代・女性)とGさん(30代・女性)である。

「昨日テレビでやってた子ども食堂の番組、みた?」「みました、みました」「ああいうの、山形にもあるといいのにな。仕事終わって子ども迎えに行行って買い物して家に帰ってご飯つくって…っていうのから開放される日がたまにでもあるとすごく助かる」「そうですねー」——交わされていたのはおおよそんなことばだった。

二人とも、近ごろ離婚や別居を経験し、ひとり親として子育てすることになった——「ワンオペ育児」(藤田2017)と呼ばれる——まさにその渦中にいた。上記のことばはそうした背景のもとで口にされたものである。しかし2016年春の

当時、山形市とその近郊にはいまだ、彼女らが実際に利用できるような子ども食堂のとりくみは存在していなかった。

あればいいなと思うものが自分たちの周りにない場合、「ぶらほ」では誰か——スタッフであることが多いが、そうでないこともよくある——がこう囁く。「そんなに必要なら、自分たちでつくっちゃえば?」と。この一言が転換点となり、やりとりがその周囲をも巻き込んで加速していくのである。このときは筆者の一言がきっかけとなった。

「実際に始めるとしたら、何が必要だろう?」「みんなが集まれる場所と食材と調理の人手かな」「許可は必要?」「まずは、実際にやっている人たちの話を聴いてみたい」「そういえばこのまえフリースペースに来ていた人、子ども食堂をやってみたいって言ってました」「子どもの貧困対策事業への助成、ちょうど県が応募してるな」「それじゃやってみるか」。

おおよそのようなやりとりを経て、同年の夏より、隔週ペースで子ども食堂のお試し開設が始まっていく。会場は「ぶらほ本館」²³。フリースペース界隈の親子がまずは利用し、そこから徐々に口コミで参加者の輪が拡大していった。回を重ねていくたびにさまざまな課題が明らかとなり、それに対処しながら自分たちに最適な方法が模索されていく。

かくして、徐々に「ぶらほ」独自の子ども食堂が姿かたちを現していったのだった。その場所には、HさんやGさんを中心に運営に関わる人びとによって「みどり町子どもひろば」(以下「ひろば」と略記)という名前がつけられ、月に数回、毎回20人ほどが集まる「ぶらほ」のテーマ・コミュニティのひとつとして定着していくこととなった。

また2016年度には、子ども食堂のコミュニティ実践と並行し、「貧困入門」と題した公開講座(全7回)が開催された²⁴。それらは「ひろば」とゆるやかに接続するように企画・設計されたテーマ・コミュニティであり、「ひろば」の実践者たち自身の研修と同時に、このテーマに関連する地域の諸資源とのつながりの形成が目指されていた。

実際、連続講座を実施する過程で、講師に招いた地域の支援者たち——社会福祉協議会やNPO(ひとり親支援、フリースクール等)の活動者たち——のほか、講座に参加した多様な主体——フードバンク、他の子ども食堂運営者、地元メディア、農家、自治体の関係課の職員など——とのつながりや協働のネットワークがうまれていった。

③性的マイノリティをめぐるテーマ・コミュニティ

2018年夏、不登校の子どもをもつひとり親のIさん(30代、女性)が、山形市の適応指導教室を介し、そこで「ぶらほ」のテーマ・コミュニティから派生して活動していた不登校の子どもをもつ親の会「クローバーの会@やまがた」(2014年設立)の存在を知らされ、その伝手をたどる形でフリースペースにやってきた。Iさんは性的マイノリティでもあった。

「ぶらほ」につながるようになったもとのきっかけや話題は「不登校の子どもの居場所」に関するものであったが、フリースペースにおけるスタッフ・松井たちとのおしゃべりのなかで、Iさんは「この人たちにだったら話しても大丈夫かな」と、自身が性的マイノリティであることをカムアウトするに至る。

Iさんのカミングアウトには、「ぶらほ」がその当時とくんでいたある企画も関係している。それは、同年秋に予定されていた『女になる』(監督:田中幸夫、2017年、日本)自主上映企画——性的マイノリティの若者と彼女を取り巻く人びとを描いたドキュメンタリーである——で、フリースペースではそうした話題のやりとりが頻繁に行われていた。

もともとフリースペースには当事者の若者も訪れており、そうした話題が交わされる機会はそれなりにあったのだが、この時期はその頻度が上がっていたのである。Iさんがフリースペースに足を踏み入れたのは、ちょうどそんな時期で、やがて彼女も上映準備の活動に参加するようになり、「ぶらほ」にも頻繁に足を運ぶようになっていく。

一方、自主上映の活動——街の人びとに映画を広報し、当日は会場に来てくれた人たちを迎える——を通じて「ぶらほ」の人びとは、自分たちの暮らす山形という街にも性的マイノリティの人びとがたくさん生きているということ、しかし彼(女)らには自分らしさを表現しつつも安心して居られる居場所が乏しいらしいという現実を知ることになる。

上映期間中、「ぶらほ」の人びとは、会場の「フォーラム山形」でお客を迎えるなか、「こんなにもたくさんいるのか」と驚くほど当事者の人びとを目にする。一方で、上映企画に応援メッセージをもらえたのは隣県の当事者サークルの人びとからのみで、山形県内からは皆無であった。継続的かつオープンに活動しているサークルが県内には不在だったのである。

こうしたことは当然、上映準備期間中に「ぶらほ」の人びとのあいだで頻繁に話題となる。そうしたコミュニケーション

にはもちろんフリースペースの常連となりつつあったIさんも参加しており、やりとりのなかで彼女は「居場所がないというのなら、カムアウトしている自分がまずはやってみよう」と決意するに至る。

かくして、彼女を中心に「多様な性について語る会」が開催されることとなった。やがてそのテーマ・コミュニティは市民サークル「カラフル」として自立、「ぶらほ」のネットワークともつながりながら独自の活動——2019年5月にドキュメンタリー『性別が、ない!』(2018年、監督:渡辺正悟)市民上映会を開催するなど——を展開していくこととなる。

このように、「ぶらほ」では、それがつくりだす〈居場所〉のあちこちで、そこに身をおく人びと——スタッフならびにコミュニティへの参加者たち——が交わしたやりとり、そしてそこで生まれた小さな声や思いが火種となり、それらに周りから燃料や空気——地域の諸資源——が供給される形で活動の炎が大きく育てられていくという風景が頻出していた。

そうした野火の広がり示していたのが、多方面へと拡大していった各種テーマ・コミュニティと近接コミュニティのクラスター、そしてそのネットワークなのだった。それらはフリースペースの「半外地」を構成し、外部のコミュニティへとゆるやかに連なっていくスロープとなっていた。これらが、若者たちが遊歩する回廊空間を構成していたのである。

5 人びとは支援空間をどう使っていたか

以上で見てきたように、「ぶらほ」はその支援空間として、拠点となるフリースペースを真ん中に、多彩な諸活動がそこで行われる各種テーマ・コミュニティをその周りに発生させ、展開していくような、ネットワーク状の時空間をつくりだしてきた。これが2006～08年あたりを境に生成、発達していった「ぶらほ」の活動の基本形態である。

フリースペースはもちろん、その周囲に点在する多様なテーマ・コミュニティもまた、そのそれぞれが参加する人びとにとって〈居場所〉として機能し、寄る辺なき人びとを承認し包摂する多彩な寄生木となっていた。こうした多機能の複合的な支援空間を地域のなかにつくりだし、機能させていくのが〈居場所づくり〉というとりくみなのであった。

ところでそうした場は、そこに身を寄せた人びとにとって、

実際にどんな意味をもつ場だったのだろうか。それらは人びとによってどんなふうに使われ、生きられ、役割を果たしていたのだろうか。本節では、ここまで描き出されてきた支援空間のありようを、それを利用した人びとにとっての意味という観点から改めて記述し直してみたい。

記述にあたってとくに照準したいのは、人びとの移動や移居のありよう、そしてそれを可能にする空間性についてである。これまでの多くの〈居場所〉論においては、その支援空間のありようが記述される際、それが一定の広がりや奥ゆきをもった場、その内部に価値や文化、資源の多様性や分布の偏りなどが存在する場として描かれることは稀であった。

だが、そこが実際に人びとによって生きられた場である以上、彼(女)らはそこに存在する凸凹の、平坦ならざる時空間のあちこちを移動したり、そのどこかに留まったりしながらその空間を活用していたはずである。以下では、そうした利用者のモビリティ(移動性)という観点から、支援空間の意味を考えてみたい。

利用者のモビリティという点で、より重要な意味を担っていたのがテーマ・コミュニティである。フリースペースの周囲に広がるそれらは、さらにその外側に広がる地域社会という外部と「ぶらほ」という支援空間との境界領域(コンタクト・ゾーン)であり、両者がゆるやかに出会う中間地帯、緩衝地帯としての役割を果たしていた。

それらは「ぶらほ」自身がその言説実践のなかで積極的かつ肯定的な意味を込めて概念化しつつ自称しているように、「汽水域」や「緑帯」のような空間、すなわち「半外地」であった。テーマ・コミュニティの連なりがつくりだすこうした中間的な場を、当の人びとはどう生き、どう使い、どう歩いていたのだろうか。

この中間的な場は、そこに参加する若者たちに、安心と刺激という二方向の作用を及ぼすものだった。第一にそこは、参加者の約半数がフリースペースに日常的に出入りしている人びとであるために、つながりづくりが苦手な〈居場所〉の若者たちにとっても参加の敷居が比較的低い。仲間や顔見知りがいることで、安心できる場となっているのである。

他方で、同時にそこにいる約半数は外部からの人びとであるため、〈居場所〉の外の社会とも地続きであり、外部からの誘因も働いている。つまりそこは、半分閉じ半分開いている空間であるため、フリースペースの若者たちにとって、〈居

場所〉に半身を置きながら、もう半身で外部の人びとと出会い、そこから外での機会を得られる場として機能している。

例えば、インタビュー集の制作企画²⁵に参加した若者Jさん(30代・男性)——以前「ひきこもり」状態にあり、「ぶらほ」につながった後も就労に踏み出せない自分に悩んでいた——の次のような語りがある。

…自分に大きく影響したのは、仕事を始めるきっかけが得られたことです。それ以前のニート状態から移行するきっかけとしては大きかったですね。…(略)…滝口さんが活動でつながった人についてくれて、その人の職場で働くことにもなったわけです。そういう具体的な伝手を手に入れることができたというのは大きいですね。(『入門2007』45頁)

テーブルおこしを担当した彼は、その際に耳にした有機農業の若者の活動に興味を示し、そこから彼らのコミュニティにつながり、就農に至ったのだった。

ところで、個々のテーマ・コミュニティは、それぞれがその参加者を介して互いにゆるやかに他のテーマ・コミュニティともつながりあっている。このため、あるコミュニティが目当てで「ぶらほ」の活動に参加した者が、つながりの糸をたどり、別のそれにも参加し始める、といった光景が頻繁に観察される。

例えば、地域のある映画サークルのメンバーであった若者Kさん(30代・男性)は、上述の『ひめゆり』自主上映(2008年)への参加をきっかけに「ぶらほ」とつながり、自らのニーズに合わせて他のテーマ・コミュニティにも少しずつ参加するようになり、最終的には、仮装の交流会「コスプレパーティ」やフリースペースの常連参加者となっている。

そうしたコミュニティの探索や渡り歩きについては、『入門2008メンバー篇』編集委員会への参加をきっかけに、別のゼミにも参加するようになった若者Lさん(20代・女性)の、次のような語りもある。

…誰に伝えるのかとかどういうことを伝えたいのかっていうのをゼロからやるってことはやったことがないということに編集会議を続けていく中でようやく気がついて、…(略)…そういう、自分なんもないっていうのに気づけたというのはすごくかいて、自分にそういう部分がないとか、ないからほしいとか、そういうところを、今やって

るゼミとかでできるんじゃないかなと思って、そういう気持ちもあってゼミには参加し続けているということです。

(トークイベント「NPOの実践に学ぶ 子どもが参画する学びとは? ~学校現場にどう活かしていくのか~」

[2009年7月29日] 質疑応答の音声データから作成したトランスクリプトより)

あるコミュニティでの自身の現状への気づきが、学びへの動機を喚起し、それが別のコミュニティへの参加を後押ししていたのである。

また、「ぶらほ」の若者たちの多くは、それぞれのニーズに応じて複数のテーマ・コミュニティを掛け持ちしている。こうした掛け持ちは、「ぶらほ」で強めに推奨されているありかたでもある。そこでは、さまざまなコミュニティへの多元的帰属と、それを通じた承認調達回路の複線化が、積極的な価値として肯定的に語られている。

例えばそれは、スタッフである松井の以下のような語りに明らかである。

人との関わりが少ない人から、君は魅力的だね、と言われても全然嬉しくない。逆にたくさんの人と関わってきた人から同じことを言われるととても嬉しい。ほめ言葉は、たくさん人を見てきて、たくさんの人と関わってきた人から言われて初めて価値が生まれる。…(略)…大事なのは分母を増やすってことだよ。周りを見ることだったり、たくさんの人と関わったり、体験を重ねることではか分母は増やせない。(『入門2008スタッフ篇』支援者インタビューに際して作成されたトランスクリプトより)

ここで語られている「分母」とは、コミュニティへの接続や帰属、そこに足場をもつという意味で用いられている「ぶらほ」のジャーゴンであり、「分母を増やす」とは、複数のコミュニティへの多元的帰属——足場を複数もつこと——を指している。

複数化や多元化を進めていくなかで、既存のテーマ・コミュニティのなかに自分のニーズを満たしてくれるものを見出せなかった若者が、新しいそれを自前でつくりだそうと動き出す場面も散見される。それを積極的に肯定し推奨する語り口、「なければつくり」が活動のさまざまな場面においてスタッフや利用者により一種の定型句として用いられていた。

例えば、上記に関わるフリースペースでのやりとりが、先の若者Lさん(20代・女性)の言葉でこんなふうにつながっている。

…私が三竹嬢に「コスプレするの?」って聞いたら、三竹嬢は「やりたいやつはあるし、衣装も売っているんだけどそれは高いし、だからって作ろうとしてもそんな技術ないしどうしようかなって思っていて」って。そしたら愛さんが「作ればいいじゃん! 教えるよ!」って。(『入門2008メンバー篇』21頁)

そうやって松井に唆され、2007年、三竹嬢(あだ名)はフリースペースにて「コスプレ衣装づくり」に着手する。それが他の利用者たちをも巻き込み、新たなテーマ・コミュニティに育っていったのだった。

この動きには、さらなる副産物もある。それまでの「ぶらほ」ではとりたてて可視化されることになかった松井のもつ洋裁という技術、さらには彼女の母校である服飾専門学校「山形女子専門学校」²⁶とのつながりがとりくみのなかで改めて呼び起こされ、「ぶらほ」の活動において次第により大きな意味をもつような新たな文脈が構成されていくようになる。

この専門学校は、やがてフリースペースに通う中学生たちがその後の進路に選択していく資源にもなっていく。このように、個々のテーマ・コミュニティはさらにその外側にある地域の社会文化や支援資源との縁を招き寄せ、両者の間にスロープ状のブリッジをも創り出していく。ゆるやかな移行支援の舞台は、そんなふうにして生まれていたのだった。

このように、「ぶらほ」の支援空間においては、その各所にさまざまな〈居場所〉が遍在し、人びとは自身のニーズや好みに応じてそのどれかに居留したり、そのいくつかを併用したり、それらの間を渡り歩いたりする形でそれらを活用していた。そうした〈居場所〉たちはさらにその外部に点在する地域のさまざまなコミュニティとゆるやかに接続していた。

「ぶらほ」の人びとは、そうしたネットワーク状の回廊空間を遊歩・散策するように、あちこちのコミュニティに寄り道し味見をしながら自らのニーズや欲望を確かめ、やがて自身の望む道を見つけ出し、それに向けて歩いていくようになる。そうした時空間を地域社会のなかにつくりだし、機能させていたのが〈居場所づくり〉という実践なのだった。

6 〈居場所づくり〉の空間実践の意味

「ぶらほ」は、そこにつながってきた人びとのさまざまな声やつぶやきに耳を澄ませ、発覚した困りごとに具体的に対処していく過程の積み重ねを通じて、中心にフリースペース、そしてその周りにさまざまなテーマ・コミュニティを配置するネットワーク状の支援空間をつくりだしてきた。これが「ぶらほ」の〈居場所づくり〉実践の全貌である。

そうしたテーマ・コミュニティは、地域内のあちこちで活動する社会文化の担い手の人びとと協働でつくりだされているものでもあるため、時間がたつにつれ、さまざまな〈居場所〉とそれらが構成するネットワーク状の支援空間が、地下茎のように地域社会の各所に埋め込まれ、はりめぐらされていくことになる。

そうしたイメージ——中心にフリースペース、その周りに複数のさまざまなテーマ・コミュニティが林立する〈居場所〉のネットワーク——は、その後フリースペースのスタッフとなった若者Lさん(30代・女性)の手で2013年にイラスト・図案化され(右図を参照)、「ぶらほ」の活動紹介などのためにさまざまな場面で用いられていくこととなった。

孤立のリスクを抱える若者たちは、「ぶらほ」がその活動空間の内／外にまたがってはりめぐらせた各種コミュニティのネットワークのどこか一点に接触し、そのコミュニティまたはフリースペースにまずは包摂される。やがて彼(女)は、それをとりあえずの足場に、別のコミュニティ群へと誘われ、それらにもう片方の足をのばしていくようになる。

そうすることで彼(女)は、その新しいアイデンティティを承認してくれる複数の社会的な回路を手にするようになる。この意味で、「ぶらほ」が行っているのは、目の前の対象者と直接向き合う支援にとどまるものでなく、そうした直接的な支援を首尾よく果たし得るような舞台装置を構築していくもの、いわば環境づくりの実践でもあるといえる。

ここでようやく私たちは、冒頭であげた仮説——相矛盾する三つの運動論の要請に対し、〈居場所づくり〉は、それぞれに対処しうる複数の、役割や機能の異なる空間をつくりだすことで応えている——の可否を確かめることができる。「ぶらほ」のフリースペースやテーマ・コミュニティの実践はそうした問いとどう関連しているのだろうか。

まずはフリースペースだが、複数性や雑多さなどに彩られたこの空間は、アイデンティティ・ポリティクスには適さない。そこに働く力学は、むしろそれを相対化し、無力化して



いくものである。他方でそうした相対化の空間は、規範や目的性が弱いため、存在論的不安のなかにあるアイデンティティ未確立の人びとにとっても居やすい空間である。

つまりそこは、「ぶらほ」という運動のなかにあって、第一に、メタ・ライブ・ポリティクスの役割を果たしている空間であると捉えることができる。荻野(2006)がいうように、そこは、利用者の若者たちが敷居の低い試行錯誤の機会を享受し、彼(女)らがそこでアイデンティティの基盤となる存在論的安心や自己信頼を獲得していくための場であった。

それだけではない。フリースペースにおける雑多さは、シティズンシップ・ポリティクスにもつながりうる空間である。シティズンシップ(市民性)とは、複数性を旨とする公共空間とそうした場での範例的なふるまいの型である(齋藤2000)。それは、さまざまな他者が共生している環境——「ぶらほ」のフリースペースのような——でこそ醸成されうる(滝口2013)。

では、フリースペースから排除されてしまったアイデンティティ・ポリティクスの居場所は「ぶらほ」のどこにあるだろうか。その在処というのが、これまで詳述してきたような各種テーマ・コミュニティである。それらの多くは、カテゴリーの共通性を機縁とした共同体であり、仲間たちからの承認が彼(女)らのアイデンティティを確たるものにする。

このように、通常なら同じ空間のなかで相争い衝突せざ

るを得ないはずのアイデンティティ・ポリティクス、メタ・ライフ・ポリティクス、シティズンシップ・ポリティクスが、「ぶらほ」ではフリースペースとさまざまなテーマ・コミュニティへと分散帰属され、いわば分割統治されていた。〈居場所づくり〉のもつ空間性がそれを可能にしていたのだった。

そうした空間性のメリットとは、利用する人びとの側にインシアチヴや決定権が保障されている点にある。その内部に一定の広さや濃淡、凸凹のある時空間——偶発性がくみこまれた場——を支援の環境としてデザインし、まるごと供給しているがゆえに、そこでは、たとえそれが同じ資源であっても、さまざまな相貌において受容され、利用する人に届く。

ある資源が「自分にはあわない」と感じたとしても、彼(女)は、同じ支援空間のどこかで別の資源を探すことができるし、セカンド・オピニオンやサード・オピニオンをも容易に入手できる。人びとの抱える困難が多文化・多文脈に及ぶものであるため、それらに包括的に対処していくのに、こうした空間的アプローチは理にかなっている。

空間性の提供により可能となる、ユーザーとなる人びとにとってのこの自由度こそ、「ぶらほ」がとりくむ環境づくりの強み、その包摂能力の要であった。こうした空間性こそ、〈居場所づくり〉というものが、社会運動史につけかわえることになった新たなモチーフであり、それによって分裂に陥りがちな運動の再統合が可能となっていたのではないかと考えられる。

さて、支援というものを考える場合、そこには、医療モデルと社会モデルという二種類の捉えかたがある。障害学(星加2007、川北2009)由来の見かたであり、前者では障害を捉える際、それが個人に属するものゆえ個人に照準して対処すべきと考え、後者では、それがその個人と環境の相互作用に起因するものゆえ環境に照準して対処すべきと考える。

こうした障害学の文脈——もともとそれは障害者の当事者運動から生まれてきたものだが——に照らしてみるとき、「ぶらほ」という〈居場所づくり〉のとりくみが行っていた空間実践——さらには、それがひとつの先端を構成しているような現代の社会運動のありよう——は、どのように位置づけられるだろうか。

改めて示すと、「ぶらほ」では、孤立する若者たちを際立たせ、社会から排除し、個人空間へとひきこもらせていくような社会の側の障壁——とりつくしまのなさ——を緩和し、彼

(女)らを迎え入れてくれるような足場や資源を地域のなかに見出したり、新たにつくりだしたり、それらをゆるやかにつないだり、といった諸実践が行われていた。

これらは、若者たちをとりまく地域の環境を再編し、彼(女)らがアクセスできる社会への回路を増やしていくとくみであるため、社会モデルの発想に立脚した支援を意味する。「ぶらほ」のエスノグラフィーから見えてくるのは、困難を抱える個人ではなく、その人をとりまく環境に照準する空間実践の、そうしたユニークさなのであった。

そう考えると、社会モデルと空間実践というのには深い関連があることがわかる。社会モデルの肝は当事者主権、当事者の選択権を保障していくための理論という点にある。そのためには、彼(女)ら自身が遊歩・散策でき、よりみちやつまみぐい、試行錯誤を経たうえで何かを選びとっていきけるような、広がりをもった空間が必要となる。

この意味で、〈居場所づくり〉という社会運動の先端がとりくんでいたのは、社会モデルとも通じる空間の創出であった。しかし、その重要性には未だ十分な注意が払われていないように思われる。社会モデルが含みもつこの空間性という観点こそが、社会運動の現代的なありようを新たに照らし出すヒントを与えてくれるだろう。

7 結論と残された課題

本稿では、相克する運動論の共棲という社会運動の現代的課題に應えるなかから生成してきた〈居場所づくり〉の実践について、その新しさがどこにあるのかを明らかにするために、「ぶらほ」という実践事例についてのエスノグラフィーを試みてきた。とりわけ、それがどのような支援空間をつくりだしていたのかについて検討してきた。

ここでは、中心にフリースペース、その周囲にさまざまな問題意識で成り立つテーマ・コミュニティが雑多にちらばるネットワーク状の支援空間が形づくられていた。さまざまな〈居場所〉が埋め込まれたその時空間は、孤立する若者たちにとって、彼(女)らがその苦しみを軽減するべく必要な支援資源を探索する、その試行錯誤のフィールドとなっていた。

さらにそれらは、ゆるやかに、それらをとりまく地域社会のさまざまな社会文化コミュニティとつながっていたため、若者たちは、「ぶらほ」の構築した〈居場所〉ネットワークからそ

のまま地続きに地域社会の各地に点在する〈居場所〉へとシームレスに移行していくということが可能となっていた(この移行と接続については、滝口(2021, 2022)を参照されたい)。

それら〈居場所〉に通底する特徴は、そこに多様な文化圏——年代も所属も職業も趣味も異なる——に身をおく人びとが同席しているということにある。そうした多様性や複数性のなかで、若者たちは、さまざまな他者と出会い、それまで自明視してきた前提や常識、当たり前と思ってきたこと、内面化してきた規範などを相対化されることになる。

これにより、彼(女)は、それまで「自分は〇〇だから××すべきでない」といった思い込みゆえに手をのばすことができなかったような、さまざまな資源ともつながれるようになっていく。規範が揺らいだその空白に、新たな資源が入りこむ余裕や遊びが生じている。それらを手がかりに、若者たちは次なる〈居場所〉への移行を果たしていくのだった。

加えて〈居場所〉には、多孔性というもうひとつの特徴がある。上述の多様性や複数性は、さまざまな背景や文脈を背負った人びとがそこに共在しているということであり、それはその支援空間に外部の異文化コミュニティとつながる孔(あな)が複数あいていて、そこからさまざまな異文化が内部にもたらされているということである。

そうした孔(あな)として機能していた場というのが、各種のテーマ・コミュニティであった。地域のさまざまな社会文化は、この孔(あな)=テーマ・コミュニティの回廊をくぐってフリースペースや他のコミュニティにもたらされる。「ぶらほ」のさまざまな〈居場所〉に通底する複数性や多様性は、こうした多孔性によって支えられていたのである。

ところで、そうした空間実践の観察を十全に行うためには、個人モデルではなく、社会モデルに立脚した視座が不可欠であり、本稿ではそれを試みたつもりである。「ぶらほ」とはある意味、そうした社会モデルの可能性を、さまざまな制約を回避しつつ追求し、それを芽吹かせ、開花させた実践であったともいえよう。

とはいえ、本稿のように〈居場所づくり〉実践の特定の時期だけを切り取ったような民族誌記述のみでは、その〈居場所づくり〉の空間配置や広がり——いわば〈居場所づくり〉の地理学——は見通せても、それらが脈動し、成長したり衰退したりしている、その動的な側面や過程——いわば〈居場所づくり〉の歴史学——は見えてこない。

「ぶらほ」の特徴は、その支援空間が16年間の活動史

を通じて発達し、その領域を拡大していった——そしてやがてその中心を枯死させた——点にある。単なる〈居場所〉の検討・考察ではなく、〈居場所づくり〉を検討・考察していくためには、その静態的な分析と描写にとどまることなく、動態的な分析と描写の作業が必要不可欠であろう。

〈居場所づくり〉を動態的に捉える、あるいはその自然史(的過程)を明らかにするというこの課題についても、16年——その前史であるフリースペースSORA(2001-03年度)の実践を入れると18年——もの時期に及んだ「ぶらほ」の活動史を素材に、改めてとりこんでいきたいと考えている。とはいえ紙幅は尽きた。稿を改めることとしよう。

【参考文献】

- 荻野達史(2006)「新たな社会問題群と社会運動:不登校、ひきこもり、ニートをめぐる民間活動」『社会学評論』57(2):311-329頁。
———(2007)「相互行為儀礼と自己アイデンティティ:「ひきこもり」経験者支援施設でのフィールドワークから」『社会学評論』58(1):2-20頁。
———(2013)『ひきこもり もう一度、人を好きになる:仙台「わたげ」、あそびとかかわりのエスノグラフィー」明石書店。
川北稔(2009)「若者の「生きづらさ」と障害構造論:ひきこもり経験者への支援から考える」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第12号、293-300頁。
———(2014)「ひきこもり経験者による空間の獲得:支援活動における空間の複数性・対比性の活用」『社会学評論』65(3):426-442頁。
共同通信取材班(2021)『わたしの居場所』現代人文社。
クリストファー・ギアーツ(1973=1987)『文化の解釈学 [I]』吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳、岩波現代選書。
齋藤純一(2000)『公共性』岩波書店。
澤村明(2006)『草の根NPOの運営術』ひつじ書房。
鈴木謙介(2013)『ウェブ社会のゆくえ:(多孔化)した現実のなかで』NHK出版。
滝口克典(2013)「就労支援のオルタナティブに向けて:若者支援NPOの市民教育実践より」『社会文化研究』16号、161-181頁。
———(2016)「社会教育研究に対峙する市民活動実践の自律性:研究と実践の間のコンフリクトの意味をめぐって」『社会教育研究における方法論(日本の社会教育 第60集)』136-147頁。
———(2019)「非正規労働の若者たちは何を求めているか?:労働NPOのアウトリーチ実践より」『社会文化研究』21号、71-93頁。
———(2021)「〈居場所〉を増やす:地方都市における市民社会実践からの一考察」『東北芸術工科大学紀要』28号:1-24頁。
———(2022)「依存先を増やす:〈居場所づくり〉実践における移行支援についての考察」『東北芸術工科大学紀要』29号、1-21頁。

田原牧(2017)『人間の居場所』集英社。

千葉雅也・綿野恵太(2020)「『差別はいけない』とみんな言うけれど。』刊行記念対談【前編】アイデンティティとシティズンシップ」(URL <https://book.asahi.com/jinbun/article/12898218>)

日本建築学会[編](2010)『まちの居場所:まちの居場所をみつめる／つくる』東洋書店。

————[編](2019)『まちの居場所:ささえる／まもる／そだてる／つなぐ』鹿島出版会。

藤田結子(2017)『ワンオペ育児:わかってほしい休めない日常』朝日新聞出版。

藤原辰史(2020)『縁食論:孤食と共食のあいだ』ミシマ社。

星加良司(2007)『障害とは何か:ディスアビリティの社会理論に向けて』生活書院。

南出吉祥(2015)「『居場所づくり』実践の多様な展開とその特質」『社会文化研究』17号、69-90頁。

柳下換・高橋寛人編(2011)『居場所づくりの原動力:子ども・若者と生きる、つくる、考える』松籟社。

レイ・オルデンバーグ(1989=2013)『サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳、みすず書房。

【引用資料】 ※直接言及・引用したもののみ

ぶらっとほーむ編『ぶらっとほーむ通信』(12号までB5判、以後A5判、12頁、毎月発行、2003年4月～2019年8月、通算193号)

————編(2006)『居場所がほしいあなたのためのぶらっとほーむ入門』(B5判、40頁)

————編(2007)『居場所がほしいあなたのためのぶらっとほーむ入門2007』(B5判、48頁)

————編(2008)『居場所がほしいあなたのためのぶらっとほーむ入門2008[メンバー篇]』(B5判、52頁)

————編(2008)『居場所がほしいあなたのためのぶらっとほーむ入門2008[スタッフ篇]』(B5判、52頁)

————編『ハタラクワタシ いまを生き抜くための若者しごと冊子』01～08号(A5判、各40頁、季刊、2011～13年)

1 「不登校・ひきこもり・ニート」もまた被害当事者のカテゴリーであり、彼(女)らの運動はアイデンティティ・ポリティクスではないかと訝しがられた方もいるかもしれない。しかし、彼(女)らの場合、その運動は当事者自らが率先して声をあげたものというよりは、その親や支援者、協力者など、当事者の周りにいた非当事者の人びとが〈居場所〉を開き、そこに声なき当事者たちを誘い集める形で行われていくことが多かった。こうした共感的で活動的な非当事者のことを、性的マイノリティの文化圏ではアクティヴ・バイスタンダーと呼ぶ。「不登校・ひきこもり・ニート」にまつわる社会運動が〈居場所づくり〉実践をその中心に据えていたのは、それがアクティヴ・バイスタンダーの人びとによるとくみだったからであると考えられる。

2 エスノグラフィー(民族誌記述)とは、対象となる同時代のある社

会や地域の「文化を書く」営みである。記述者はフィールドワークなどで得た質的データを「厚く記述する」ことでそれを果たす。

3 「ぶらほ」の活動史は、その運動アイデンティティが確立するまでの第一期(2003～07年度)、第一期に確立した〈居場所づくり〉の方法論を地域で具体的に展開していく第二期(2008～12年度)、とりくみが制度化されることになりその作用のもとで上記の方法論が変質を遂げていく第三期(2013～17年度)、解散へと至る第四期(2018～19年度)という四つの時期に区分できる。よって本稿の記述は、第一期から第二期にかけての「ぶらほ」の活動風景を対象としたものであることになる。「ぶらほ」の活動史そのものを事例とした〈居場所づくり〉の自然史(的過程)の考察については、稿を改めて論じたい。

4 具体的には、スタッフが企画し、利用者Lさん(20代・女性)に手伝ってもらって制作した『入門2006』、同じくスタッフが企画し、利用者Lさんに加え、Fさん(20代・女性)、Cさん(10代・女性)といっしょに制作した『入門2007』、そして利用者Lさん、Fさん、Cさん、Mさん(10代・女性)、Dさん(20代・男性)が企画・制作した『入門2008[メンバー篇]』、スタッフと利用者Lさんとで企画・制作した『入門2008[スタッフ篇]』の四冊である。

5 冊子群に載っている声やことばは、もちろん当時「ぶらほ」に関わっていた人びとの合意——公開される媒体に掲載されることへの許諾——を経て掲載されたものだが、2022年現在、人びとのスタンスは変わっているかもしれない。このため、本稿では引用の際に仮称を使うなど、できる限りの匿名性の確保につとめたい。

6 公刊されているものについては、基本的に、山形県立図書館や山形市立図書館などで閲覧することができる。公刊されていないもの、例えば、「ぶらほ」の個々の事業に関する作業ファイルや報告文書、スタッフが用いていた活動ノートなどは、2022年現在、それらのアーカイブを継承した「ぶらほ」の後継団体「よりみち文庫」(2019年9月設立、山形市緑町)が管理している。

7 2003～2012年度のあいだは山形市江南、2013年度以降は山形市緑町に拠点をかまえて活動していた。NPO会員は2003年度から10年ほどは2名(この二人がNPO会員、同運営委員ならびに共同代表をつとめる)であったが、2013年度以降は10名でいどとなる。この会員の人びとがさまざまなかたちで活動を担う有償・無償のスタッフとなっていた。

8 後継団体は下記のとおり(2022年現在)。山形市南原町に拠点を置く「NPO法人クローバーの会アットやまがた」(2019年設立、2021年法人化、代表:樋口愛子)、同市銅町に拠点を置く「ぶらいず」(2019年設立、代表:佐藤茜、相談役:松井愛)、同市緑町に拠点を置く「よりみち文庫」(2019年設立、共同代表:小笠原千秋、菊地純、滝口克典)。

9 この時期、2006～08年頃のフリースペースの空間配置やその実際の使われかたについては、『入門』各号においてその詳細がマンガで記録されている。本稿の記述は主にそれらに依拠している。

10 支援団体の多くが通常実施するであろうインタビューやその際に作成する個人カルテのようなものも、ここには一切存在していない。ただし、誰がその日フリースペースにやってきたのかを記録する日誌は存在しており、そこには参加者各自がニックネーム(自称あり)で出欠を書き込む。つまりそこでは自己情報を各自があるていどコントロールできるようになっている。よって、長年そこに通ってきているが、

病歴や経歴はもちろん本名や年齢などをスタッフや他のメンバーが知らない、というような参加者も珍しくない。

11 こうしたスタッフの立ち居振る舞いに関連して、「ぶらほ」では、フリースペースを「フリースナック」、スタッフの松井を「愛ママ」と、飲食店とその女性店主に例える冗談が頻繁に交わされる。個々の参加者の目的や動機が統制されない、コミュニケーションそれ自体が目的化している点であるという点で、フリースペースは「喫茶店」「スナック」などと親近性をもつ。

12 2007年度は山形県雇用労政課からの委託事業「若年無業者のための社会参加体験プログラム開発事業」、2008年度は山形県が新設した市民活動支援ファンド「やまがた社会貢献基金」からの助成事業「若年無業者向け支援プログラムの定期的な開発・実施事業」のもとで実施された。

13 『ひめゆり』上映会(2008年)の終了後、同企画の問題意識を引き継ぐ形でとられました。山形市の市民活動支援ファンド「山形市コミュニティファンド」からの2008年度助成を受けた「戦争と平和について考える若い世代の学びの場づくり事業」として実施され、ゼミの成果は2009年3月、戦争入門ブックガイド『戦場に送られたくない私たちのための戦争入門』(A5判、64頁、500部、販売価格500円)にまとめられ、発行された。

14 2009年度の「やまがた社会貢献基金」助成を受けた「若年市民を対象とした「NPO・市民活動入門ゼミ」の定期開催事業」として実施され、ゼミの成果は2010年3月、NPO入門ブックガイド『社会のつくりかた!!』(A5判、128頁、500部、販売価格1,000円)にまとめられ、発行された。

15 2009年度の「山形市コミュニティファンド」助成を受けた「若者向け山形の著作者紹介ガイドブック作成・発行事業」として実施され、ゼミの成果は2010年2月、ヤマガタ本ブックガイド『ヤマガタ発:山形発・活字文化入門ブックガイド1999-2009』(A5判、96頁、500部、販売価格1,000円)にまとめられ、発行された。また、2010年度と12年度には「やまがた社会貢献基金」の助成を受けた「ヤマガタ文学遺産」ガイドブック作成事業」ならびに「ヤマガタ文学遺産」ガイドブック第2集作成事業」として実施され、ゼミの成果は2011年3月にヤマガタ文学ブックガイド『ヤマガタ文学遺産ガイドブック』(A5判、40頁、2,000部、無料配布)、2013年2月に『ヤマガタ・ストーリーズ:ヤマガタ文学遺産ガイドブック2』(A5判、40頁、1,000部、無料配布)にまとめられ、発行された。

16 2010年度の「独立行政法人福祉医療機構」からの助成を受けた「青少年支援NPO研修用テキストの作成事業」のもとで実施され、ゼミの成果は2011年4月に若者論ブックガイド『若者リアル:支援者のための若者入門ブックガイド』(A5判、216頁、500部、無料配布)にまとめられ、発行された。

17 2011年度の「キリン福祉財団」助成を受けた「高校生向け「よのなか」入門ブックガイド作成・発行事業」、2012年度の「山形市コミュニティファンド」助成を受けた「学校図書館支援のためのパスファインダー制作事業」のもとで実施された。ゼミの成果は、前者については2012年3月に高校生向け冊子『自分のつくりかた!残念なおトナにならないための、「シャカイ系」入門ブックガイド』(A5判、40頁、2,000部、無料配布)としてまとめられて発行され、後者については2013年3月に中学生向けパスファインダー(A5判、20シート)としてまとめられ、その原稿が市内すべての中学校・学校図書館に提供された。

18 2011年1月～13年3月までの山形県地域・交通政策課からの委託事業「若者の移住受入体制支援事業」のもとでとられました。ミニコミ実践。置賜地方の若者たちが2003年より行ってきたミニコミ実践『ほんきこ。』の方法論が採用され、その村山版ならびに庄内版を意識しつつとられました。その成果が2011年度の『山形よみかき小冊子 ひまひま』(A5判、01～04号、各500部、無料配布)ならびに『庄内よみかき小冊子 もあ』(A5判、01～04号、各500部、無料配布)である。前者『ひまひま』は同事業終了後もゼミメンバーの自主企画として続けられ、「ぶらほ」が活動を終えた2019年春に発行された第23号(以後休刊)に至るまで、テーマ・コミュニティとして機能した。

19 2011年度の「山形市コミュニティファンド」助成を受けた「非正規雇用の若者の居場所／学びの場づくり事業」、2012年度の「やまがた社会貢献基金」助成を受けた「不安定労働の若者たちの居場所／学びの場づくり事業」のもとで実施され、その成果が『ハタラクワタシ』(A5判、01～08号、01～04号は500部、05～08号は1,000部、無料配布)にまとめられ、発行された。詳しくは、滝口(2019)を参照のこと。

20 山形市香澄町にある映画館。1979年に当時の山形市の若者たちがつくった自主上映サークル「山形えいあいれん」が5年間の市民運動を経てつくりだした「市民の映画館」。その来歴ならびに「ぶらほ」とのかかわりについては、滝口(2021)を参照。

21 子どもの貧困をめぐるテーマ・コミュニティ、性的マイノリティをめぐるそれは、2022年現在、「ぶらほ」解散後もなお活動を継続中である。前者は「ぶらほ」後継の「NPO法人クローバーの会あつとやまがた」、後者は同じく後継の「ぶらいず」によって担われ続けている。

22 しかし、その2016年春以降、「ぶらほ」のとりくみとも並行するように、いくつかのこども食堂のとりくみが始まっていった。同年度末には山形市内で5か所(「ぶらほ」の運営する「みどり町こどもひろば」を含む)が活動するまでになった。

23 これまで本文中で記述されてきた「ぶらほ」のフリースペースとは山形市江南の借家をさしているが、活動がスタートして10年目、かねてからの家主との約束——10年で退去すること——により、2012年度をもって拠点を移すこととなった。その移転先が山形市緑町の住宅街にある木造平屋の古い民家で、これが「ぶらほ本館」と呼ばれていた。「本館」と呼ぶのは「別館」があるからで、ちょうどこの移転の時期、「ぶらほ」が山形県より「まちなかフリースペース開設事業」の委託を受け、空き店舗を借りてフリースペースを開設することになり、その入居先となる空きオフィスが「本館」の目と鼻の先に位置していたのだった(より正確には、「本館」のすぐ近くに空きオフィスの適切な物件を見つけた)。かくして2013年度以降は、雑居ビル3階のフリースペースと、そのすぐそばにある平屋の「本館」という二拠点が活動の主な舞台となっていった。「本館」は、こども食堂などのさまざまなテーマ・コミュニティに活用され、「ぶらほ」が解散した後の二年間は後継の「クローバーの会@やまがた」が活動拠点として用いた。

24 山形県若者支援・男女共同参画課「やまがた若者チャレンジ応援事業(2016年度)」の助成を受け、「脱貧困プロジェクト@ぶらほ実行委員会」が事業主体となってとりました。連続講座の講師は以下の通り。①稲葉剛氏(認定NPO法人自立生活サポートセンターもやい)、②渡邊陽氏(山形県社会福祉協議会)、③伊藤孝氏

(山形県母子寡婦福祉連合会)、④西上紀江子氏(山形てのひら支援ネット)、⑤白石祥和氏(NPO法人With優)、⑥貝沼論衣氏(会津子ども食堂・学習ボランティア)、⑦鈴木綾氏(四つ葉学舎)。講座の内容は、冊子『貧困サバイバルガイド:理不尽と闘うための理論と資源 入門』(A5判、40頁、1,000部、無料配布)にまとめられた。

25 2003年度にとりくまれた「若者たちの“いろんな生きかた・働かかた”情報誌」の編集・発行事業」。東北公益文科大学「平成15年度NPO支援事業」による助成のもとで実施され、県内各地でユニークな生きかた・働かかたを実践する15人の若者たち取材したインタビュー情報誌『これが、わたしの生きるみち。』(A5判、128頁、初版500部・第二刷1,500部、販売価格1,200円)を2004年3月に制作・発行した。

26 山形市宮町、JR北山形駅の近くに位置した服飾専門学校(1947年開校、2015年閉校)。高等科(3年)、専門科(2年)からなっていた。同校は長年、山形市内の「不登校」の子どもたちを受け入れてきた学校でもあり、松井もまた中学校での「不登校」経験のうちに同校に入学し、両課程を経て卒業している。同校と「ぶらほ」のかかわりについては、滝口(2021)を参照。